

問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 [50点]

1 私たちは昼と夜をまったく別の空間として体験する。とくに夜の闇やみのなかにいると、空間のなかに闇が溶けているのではなく、逆に闇そのものが空間を形成しているのではないかと思えてくる。闇と空間は一体となって私たちにはたらきかける。
*1 ミンコフスキーは、夜の闇を昼の「明るい空間」に対立させたうえで、その積極的な価値に注目する。

15 ……夜は死せるなにもかでもない。ただそれはそれに固有の生命をもっている。夜に於おても、私は梟たきゅうの鳴き声や仲間なかの呼び声を聞いたり、はるか遠くに微かすかな光が尾をひくのを認めたりすることがある。しかしこれらすべての印象は、明るい空間が形成するのとは全然異なつた基盤の上に、繰り広げられるであろう。この基盤は、生ける自我と一種特別な関係にあり、明るい空間の場合とはまったく異なつた仕方であらう。自我に与えられるであろう。

明るい空間のなかでは、私たちは視覚によつてものをとらえることができる。私たちとものあいだ、私たちと空間のあい

20 だを距離がへだてている。距離は物差ものさしで測定できる量的なもので、この距離を媒介にして、私たちは空間と間接的な関係を結ぶ。私たちと空間のあいだを「距離」がへだてているため、空間が私たちに直接触れることはない。

25 2 一方、A 闇は「明るい空間」とはまったく別の方法で私たちにほたらきかける。明るい空間のなかでは視覚が優先し、その結果、他の身体感覚が抑制される。ところが闇のなかでは、視覚にかわつて、明るい空間のなかで抑制されていた身体感覚がよびさまされ、その身体感覚による空間把握が活発化する。私たちの身体は空間に直接触れ合い、空間が私たちの身体に浸透するように感じられる。空間と私たちはひとつに溶けあう。それは「物質的」で、「手触り」のあるものだ。明るい空間はよそよそしいが、暗い空間はなれなれしい。恋人たちの愛のささやきは、明るい空間よりも暗い空間のなかでこそふさわしい。

30 3 闇のなかでは、私たちと空間はある共通の雰囲気に参加している。私たちを支配するのは、ミンコフスキーが指摘するように、あらゆる方向から私たちを包みこむ「深さ」の次元である。それは気配に満ち、神秘性を帯びている。

35 4 「深さ」は私たちの前にあるのではない。私たちのまわりであつて、私たちを包みこむ。しかも私たちの五感全体をつらぬき、

身体全体に浸透する共感的な体験である。

40 **5** 近代の空間が失ってきたのは、実は深さの次元である。近代建築がめざしてきたのは明るい空間の実現であった。^{※2} ヒロテイ、連続窓、ガラスの壁、陸屋根は、近代建築が明るい空間を実現するために開発した¹ ソウチである。人工照明の発達がそれに² ハクシヤをかける。明るい空間が実現するにつれ、^B 視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ。視覚はものと空間を対象化する。空間は測定可能な量に還元され、空間を支配するのは距離であり、ひろがりであると考えられるようになった。それと同時に、たがいに異なる意味や価値を帯びた「場所性」が空間から³ ハイジョされ、空間のあらゆる場所は人工的に均質化されることになった。こうして、場所における違いをもたない^{※3} ユークリッド的な均質空間ができあがる。

60 **6** 深さは、空間的には水平方向における深さをあらわしている。幅に対する奥行^{※4}である。しかし、均質化された近代の空間にはこの奥行が存在しない。なぜなら、均質空間はどの場所も無性格で取り換え可能だから、奥行は横から見られた幅であり、奥行と幅は相対化された距離に還元されてしまうからだ。均質空間では、幅も奥行も「距離」という次元に置き換えられる。したがって、そこにあるのは空間のひろがりであり、深さがない。

60 **7** ミンコフスキーが深さについて語っているのは、もつぱら空間的な意味においてである。一般に西洋では、深さは水平方向

における深さであり、純粹に空間的な意味しかもっていないようである。それに対して、わが国では深さは水平方向における

75 **8** たたとえば来客を家のなかに案内するさい、よく「奥へどうぞ」などという。具体的に座敷とか応接間といわずに「奥」という。この場合の「奥」とはいったい何を指しているのだろうか。それが具体的な部屋を指しているのではないことは明らかである。「座敷へどうぞ」「応接間へどうぞ」といわれれば、部屋のイメージを頭に思い描くこともできる。だが奥といわれると、少しおおげさにいえば、いつたいどこへつれて行かれるのだろうかという一抹の不安が心をよぎる。奥は漠然として、つかみどころがない。奥は具体的な対象物を指すことばではなく、漠然とあるなものかを暗示することばである。このあたりに、日本語に固有な奥ということばの深い意味がかくされているように思われる。こころみに辞書^{※4}を引いてみると、奥には次のような意味がある。

80 「外(と)」「端(はし)」「口(くち)」の対。オキ(沖)と同根。空間的には、入口から深く入った所で、人に見せず大事にする所をいうのが原義。そこにとどくには多くの時間が経過するの
で、時間の意に転ずると、晩(おそ)いこと。また、最後・行

く先・将来の意。〈空間的に場所について〉入口から深く入った所。最も深くて人のゆかない、神秘的な所。末尾。〈道の奥〉の意で奥州。みちのく。奥まつた部屋。〈心理的に大切にする所の意で〉心の底。芸の秘奥。貴人の妻の居室。貴人の妻。奥方。夫人。〈時間に転用して〉晩(おそ)いこと。また、最後。将来。行く先。

要するに、奥は空間的にも時間的にも到達しがたい最終的な場所、時間を指している。それだけではない。奥義、奥伝ということばがあるように、奥には空間的、時間的な意味のほかに、深遠ではかりがたいという心理的な意味もある。c奥は空間的、時間的、心理的なさまざまな意味を含みながらひろく日本の文化を支えている。

9

奥を具体的に体験できる場所に日本の古い神社がある。神社の境内は鎮守の森とよばれる深い森につつまれ、その森を分け入るように長い参道が続いている。参道は社殿に向かつてまっすぐにのびているのではない。右に左に折れ曲がり、つま先あがりの坂道になったり険しい石段になったり、実に変化に富んでいる。参道の両脇には鳥居や献燈けんとうがいくつもならび、うつそうとした木立や苔こけむした庭石などとともに巧みに配されている。そして手水舎みずや、回廊、拜殿、玉垣、正殿へと続くが、神社の中心である正殿には仏教寺院のように偶像が安置されているわけではない。せいぜい神の依代よしろとしての鏡があるくらいだ。

10

仏教寺院の中心は仏像とそれが安置してある本堂だが、神社にはそれに相当するものがない。上田篤氏あつたが指摘するように、神社の中心はむしろ参道である。見通しのきかない曲がりくねった参道を一步一步⁴フみしめながら歩いて行くと、私たちの精神はしだいに高揚し、聖なるものに近づいて行くような感じをいだく。そのとき、私たちは奥を感じる。奥は最終的な建物ではなく、そこへいたるまでのプロセスを造形化したものだといえる。

奥について最初のまとまった論稿を発表したのは榎文彦氏えのふみひこである。榎氏は奥の特性を次のように説明する。

奥性は最後に到達した極点として、そのものにクライマックスはない場合が多い。そこへたどりつくプロセスにドラマと儀式性を求める。つまり高さでなく水平的な深さの演出だからである。多くの神社に至る道が曲折し、僅かな高低差とか、樹木の存在が、見え隠れの論理に従って利用される。それは時間という次数すうすうを含めた空間体験の構築である。

奥は時間的なヨウ⁵ソを含む概念である。その点、「間」との類似性が考えられて興味深い。奥は純粹に空間的な意味での奥行ではなく、目的へ向かうプロセスの演出によって私たちの心のなかに生じる心理的な距離感であり、時間感覚である。人間の身体感覚に深くかかわる概念だといえる。また榎氏は、奥

は「見る人、つくる人の心のなかでの原点」であり、「見えざる中心」だという。さきほどの「奥へどうぞ」ということばには、案内する側とされる側の両者の心のなかの原点にむかつて行くというニュアンスがある。案内された瞬間から、すでに奥の空間体験がはじまっているのである。奥は最終的に到達すべき建物や部屋が目的ではなく、そこへいたるプロセスに儀式と演出を求めるからだ。

(狩野敏次「住居空間の心身論——『奥』の日本文化」による。
ただし、本文の一部を改変した)

- ※1 ミンコフスキー——フランスで活躍した精神科医・哲学者（一八八五—一九七二）。引用は『生きられる時間』による。
- ※2 ピロティ、連続窓、ガラスの壁、陸屋根——ピロティは、二階以上を部屋とし、一階を柱だけにした建物の一階部分。連続窓・ガラスの壁は、広範な視野を可能にした近代建築技法。陸屋根は、勾配が少なく、ほとんど水平な屋根。
- ※3 ユークリッド——紀元前三〇〇年ごろのギリシアの数学者。それまでの幾何学を集大成した。
- ※4 辞書——ここでは『岩波古語辞典』を指す。
- ※5 手水舎、回廊、拝殿、玉垣、正殿——手水舎は、神社で参拝者が手を洗い、口をすすぐための水盤を置く建物。ちようずや、とも読む。回廊、拝殿、玉垣、正殿は、いずれも神社を構成する施設。
- ※6 依代——神を祭る際、神霊の代わりとして据えたもの。
- ※7 上田篤——建築家・建築学者。指摘は『鎮守の森』による。
- ※8 榎文彦——建築家・建築学者。引用は『見えがくれする都市』による。
- ※9 次数——文字因数の数（ x^2 なら2、 x^3 なら3）を指す数学术語。ここでは複雑さの度合いを示す。

問1

傍線部1～5の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(各2点)

1 ソウチ

- ① 直ちにソウサク隊を出す
- ② 大きなソウドウを引き起こす
- ③ 鍛練でソウケンな身体をつくる
- ④ 面接でのフクソウに気をつかう
- ⑤ 古いチソウウから化石を採る

2 ハクシャ

- ① ハクリヨクに欠ける
- ② ハクジヨウな態度をとる
- ③ ハクシユを送る
- ④ ハクシキを誇る
- ⑤ ハクジヨウさせられる

3 ハイジヨ

- ① すぐれた人材がハイシユツする
- ② 少数意見をハイセキしない
- ③ フハイした社会を浄化したい
- ④ ハイシン行為の責任を問う
- ⑤ 優勝してシユクハイをあげる

4 フみしめ

- ① 仮面ブトウ会を開く
- ② 改正案をセントウする
- ③ 注文がサットウする
- ④ 路面がトウケツする
- ⑤ 旅先でトウナンにあう

5 ヨウソ

- ① ソセンを敬う
- ② ソゼイを課す
- ③ ソボクな人柄
- ④ 人間関係がソエンになる
- ⑤ ついにソシヨウを起こす

問2

傍線部A「闇は『明るい空間』とはまったく別の方法で私たちにはたらきかける」とあるが、そのはたらきかけは私たちにどのような状況をもたらすか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

(8点)

- ① 視覚的な距離によってへだてられていた私たちの身体と空間とが親密な関係になり、ある共通の雰囲気とともに参与させられる。
- ② 物差で測定できる量的な距離で空間を視覚化する能力が奪われ、私たちの身体全体に浸透する共感的な体験も抑制させられる。
- ③ 距離を媒介として結ばれていた私たちの身体と空間との関係が変容し、もっぱら視覚的な効果によって私たちを包み込む深さを認識させられる。
- ④ 視覚ではなく身体感覚で距離がとらえられ、その結果として、空間と間接的な関係を結ぶ私たちの感覚が活性化させられる。
- ⑤ 視覚のもつ距離の感覚がいつそう鋭敏になり、私たちの身体と空間とが直接接触れ合い、ひとつに溶け合うように感じさせられる。



問3

傍線部B「視覚を中心にした身体感覚の制度化がすんだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

(8点)

- ① 身体とは一線を画していた視覚が、身体感覚の中に吸収されるようになってきた、ということ。
- ② 身体感覚相互の優劣関係が、視覚を軸にするかたちで統御されてきた、ということ。
- ③ 視覚以外の身体感覚が、人為的な力によって退化を余儀なくされてきた、ということ。
- ④ 五感全体をつらぬく共感覚を、視覚だけが独占するようになってきた、ということ。
- ⑤ 視覚の特権性や優位性を、人々が自発的に享受するようになってきた、ということ。



問4

傍線部C「奥は空間的、時間的、心理的なさまざまな意味を含みながらひろく日本の文化を支えている」とあるが、その「奥」の例として、筆者は神社の参道を挙げている。神社の参道における体験のどのような点に筆者は注目しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

(8点)

- ① 神社の参道では、人は神の依代である鏡を安置してある正殿にたどりつき、そこにいたるまでの神社独特の距離の長さを実感できる点。
- ② 神社の参道では、人は信仰の対象である鎮守の森に分け入っていき、信仰を求める心が優しく包み込まれていることに気づかされる点。
- ③ 神社の参道では、人は見通しのきかない曲がりくねった道を正殿に向かって時間をかけて進み、聖なるものに近づく高揚感を味わうことができる点。
- ④ 神社の参道では、人は献燈や庭石を配した木立の中に続く石段をのぼり、自然と人間の精神とが調和した環境に身を置く充足感をいただくことができる点。
- ⑤ 神社の参道では、人は最終的な建物である正殿をめざしてひたすら歩き、正殿の中の鏡に向き合うことでそれまでのプロセスを再認識することができる点。



問5

傍線部D「案内された瞬間から、すでに奥の空間体験がはじまっている」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

(8点)

- ① 「奥へどうぞ」と言われたときから、空間的にも時間的にも到達しがたい「奥」を、到達点そのものではなく、そこにいたる過程において心理的な距離や時間として感じること。
- ② 「奥へどうぞ」と言われたときから、空間的な意味をもつ「奥」を、そこにいたる測定可能な距離としてではなく、明確に限定された時間としても感じること。
- ③ 「奥へどうぞ」と言われたときから、深遠ではかりがたい「奥」を、数量に還元できる対象とするこ
とで、無性格で取り替え可能な距離や時間として感じること。
- ④ 「奥へどうぞ」と言われたときから、不安にさせられる「奥」を、案内する側とされる側が同じ対象
物をめざして一体感をもつことで、親密な距離や時間として感じること。
- ⑤ 「奥へどうぞ」と言われたときから、闇に包まれて気配にみちている「奥」を、神秘的な儀式が行わ
れている空間とすることで、人知を超えた心理的な距離や時間として感じること。



問6

この文章では論を進めるうえで、具体的な事例を挙げたり、他の文献を取り上げたりしている。筆者がそのような論の進め方をする意図の説明として最も適当なものを、次のA群・B群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(各4点)

A群

- ① ピロティ、連続窓等の例は、空間を量的に把握することによって奥行という存在を消してきた近代建築の価値観の妥当性を確認するために用いられている。
- ② ピロティ、連続窓等の例は、人工照明の発達によってひろがりのある空間の実現をめざすようになつてきた近代建築の技術的進歩を評価するために用いられている。
- ③ ピロティ、連続窓等の例は、近代建築が闇の追放によつてもたらした空間の均質化が内包する問題点を引き出すために用いられている。
- ④ ピロティ、連続窓等の例は、近代建築が明るい空間をめざすことによつて深さという次元を失つてしまった誤りの重大さを証明するために用いられている。

B群

- ① ミンコフスキーの文章を取り上げたのは、近代における西洋と伝統的な日本とのあいだの、空間のとらえ方の違いを明確にするためである。
- ② 奥の意味についての辞書の説明を取り上げたのは、日本語に固有な奥の意味が、辞書などでは表しきれないことを証明するためである。
- ③ 上田篤の指摘を取り上げたのは、神社の参道に関する考えには共感しつつ、奥については対立する見解をもつことを強調するためである。
- ④ 槇文彦の文章を取り上げたのは、奥についての先駆的な論として紹介し解説を加えることによつて、自説の説得力を高めるためである。

A
□
・
B
□